御嶽山 信仰の歴史を解説

愛知学院大教授ら 木曽で講座

画像を示しながら講演する小林教授（右）＝木曽町の三岳交流促進センターで

長野、岐阜両県にまたがり、4月に国定公園に指定された御嶽山（標高3067メートル）への理解を深める講座が13日、木曽町の三岳交流促進センターで開かれた。愛知学院大の小林奈央子教授（宗教学）が講師の一員となり、東海地方と御嶽山の関係や信仰の歴史を解説した。

小林教授はまず、御嶽山を愛知県内から撮影した複数の画像を紹介。濃尾平野の農民が河川の源流地として、御嶽山に感謝を込めて拝んだという歴史にも触れた。江戸時代、御嶽山への登山と信仰を広めるきっかけをつくった覚明（かくめい）行者の出身地が、現在の同県春日井市であることも語った。

開祖となった覚明行者らを追福するために建立され、現在は行者、信者やその遺族が霊魂のよりどころとして設ける「霊神碑」について解説。御嶽山麓や、同県日進市の岩崎御嶽山などの霊神場に碑を立ててきた歴史があり「死後に霊魂は『御山へ行く』という信仰がある」と語った。

講演後の取材に「数ある山岳信仰の中でも霊神碑の存在はほかにない特徴で、今も人々が山に登って信仰する理由にもなっている」と説明した。

講座は「三岳地域学講座」として三岳公民館が主催。約50人が聴講した。

（阿部竹虎）